おわりに

本書でインタビューしている方々とは、もともと深いつき合いがある。それにもかかわらず、今回、初めて聞く話が続出して、かなりとまどった。映画『ポチの告白』を見て、自分も「告白」するというスタイルをとったため、これまで秘めてきた事実や経験、意見などが明かしやすかったのかもしれない。おかげで日本の警察やマスコミ、司法の内実をより深くえぐれたと自負している。

『ポチの告白』に対する感想で「救いがない」というものをよく見かける。事実に基づく映画である以上、現在の日本の社会が「救いがない」わけだ。それならば、どうするかという問題が出てくる。しかし、ほとんどの国民は「救いがある」まで待つつもりらしい。そもそも「救いがない」という言葉自体、かなり受け身だ。

過去、小さな努力を怠ってきたために、現在、大きな努力が必要とされている。ここで何もしなければ、将来、さらに大きな努力が必要とされるし、それでも手遅れかもしれない。こういう反省から、私自身も自分で出版事業をはじめ、本書を刊行したしだいである。